

ルソン島北部、カガヤン川下流域の 貝塚遺跡に見られる居住の断絶と継続 ー河川の氾濫との関連でー

田 中 和 彦

I. はじめに

河川の下流域において、河川の氾濫は、その地域の住民の生活に大きな影響を与えるものである。ルソン島北部を南から北へ流れるカガヤン川は、フィリピンにおける大規模河川の一つである。その下流域には、「貝塚洪水伝説」¹と呼ばれる言い伝えがある。カガヤン川下流域の貝塚が、洪水の後に出現したという伝説である。小川英文氏は、貝塚分布の中心であるラロ (Lal-lo) 町の中の一村、カタヤワン (Catayauan) 村の老人のことばとして、「おまえは日本人だから知らないだろうけれど、昔、世界を覆う大洪水があったのだよ。その洪水が聖書にあるノアの洪水なんだ。洪水が引いてみると、それまではなかった貝塚がここにできていたというわけさ」²という話を伝えている。こうした「洪水伝説」、あるいは、洪水と貝塚の関係は、遺跡や遺物といった実際の考古学的資料からどのように考えることができるのであろうか。筆者は、ここで、これまでに発掘した及び発掘に加わった、カトゥガン (Catugan) 貝塚とマガピット (Magapit) 貝塚という二つの貝塚遺跡と、その出土土器を資料として、カガヤン川下流域における自然堤防上の居住地の放棄と、同時期における石灰岩丘陵上にお

ける居住の継続を明らかにし、カガヤン川の氾濫と貝塚の関係を考察してみたい。

II. 自然堤防上における居住地の放棄 ーカトゥガン貝塚の発掘と成果ー

2.1 カトゥガン貝塚調査の意義

カトゥガン貝塚は、総出土遺物数540点程の小規模な貝塚である。しかしながら、交互に重なった2枚の貝層と1枚の混貝土層及び1枚の土層からなる4枚の文化層と、各層からの異なった遺物群、特に土器群を明らかにした事から、ラロ貝塚群の編年研究上最も重要な遺跡の一つになった。ここでは、まず、この遺跡とその調査成果³について紹介を行いたい。

2.2 カトゥガン貝塚の位置と立地

ラロ貝塚群は、ラロ町を中心に北隣のカマラニウガン (Camalaniugan) 町、さらにその北のアパリ (Aparri) 町、南隣のガッタラン (Gattaran) 町の4町にわたり、主にカガヤン川両岸に沿って分布する貝塚群 (Fig.1) である。その分布域は、南北約35kmに及んでいる。カトゥガン貝塚は、ラロ町を構成する35ヶ村のうちの一村であるカトゥガン村に所在する。この村は、現在、町役場のあるラロ町、セントロ (Centro) 村の南西約4km程の所に、川

を隔てて位置している (Fig.1)。カガヤン川は、カトゥガン村の南方で、北北西に向う流れを北北東に変え、川中に全長3.4km程の島を作っている (Fig.2)。そのため、カガヤン川は、ここで島の東を流れるカガヤン川本流と、西を流れるマラナオ (Malanao) 川に分かれる。カトゥガン貝塚は、そのうちのマラナオ川に面した自然堤防上に立地する貝塚遺跡である (Fig.2)。その全長は、地表面における貝の分布から250m程と考えられる。

2.3 カトゥガン貝塚の発見と調査

この遺跡は、1988年1月2日、カタヤワン村の作業員、カルリト・コンシソ (Carlito Conciso) 氏と彼の知人の同村、インニョン (Innyong) 氏の案内で、上智大学アジア文化研究所教授の青柳洋治氏、

当時アテネオ・デ・マニラ (Ateneo de Manila) 大学に留学中であった現東京外国語大学助教授の小川英文氏、フィリピン国立博物館技官のE・ラリオス (Eustakio Larios Jr.) 氏及び当時、上智大学大学院生であった筆者が、最初に踏査を行い発見したものである⁴。その後、長らく発掘調査にとりかかることができなかったが、1995年から3カ年計画の調査に小川英文氏が文部省科学研究費の交付を受けたことによって、小川英文氏を研究代表者とする研究「ラロ貝塚群の発掘調査」(研究課題 No.07041006)⁵が始った。本遺跡の調査はその一環として1996年、筆者が中心となって行ったものである⁶。その後、2001年、小川英文氏が中心となって再度発掘調査が行われた⁷。ここでは、1996年に筆

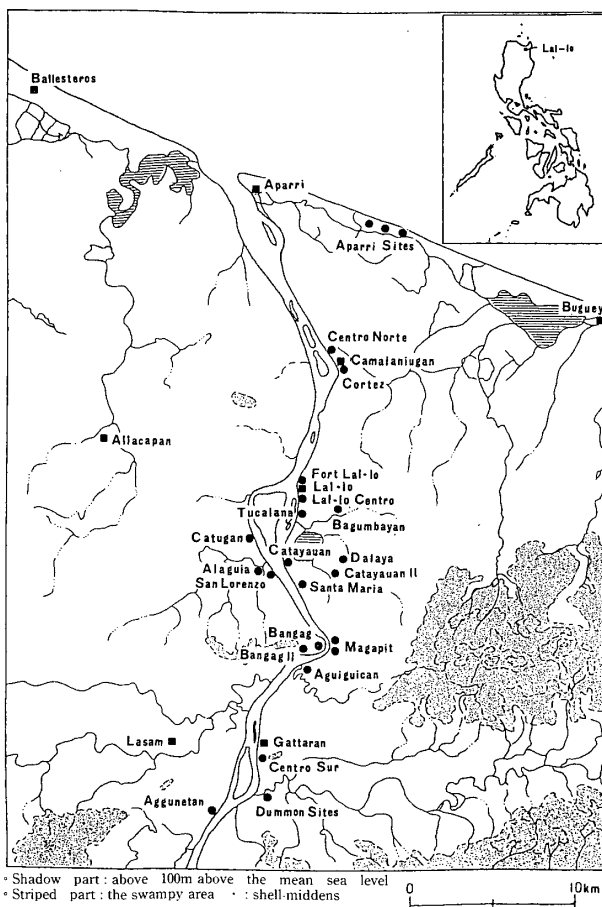


Fig.1 Distribution Map of Lal-lo Shell-middens.

ラロ貝塚群分布図

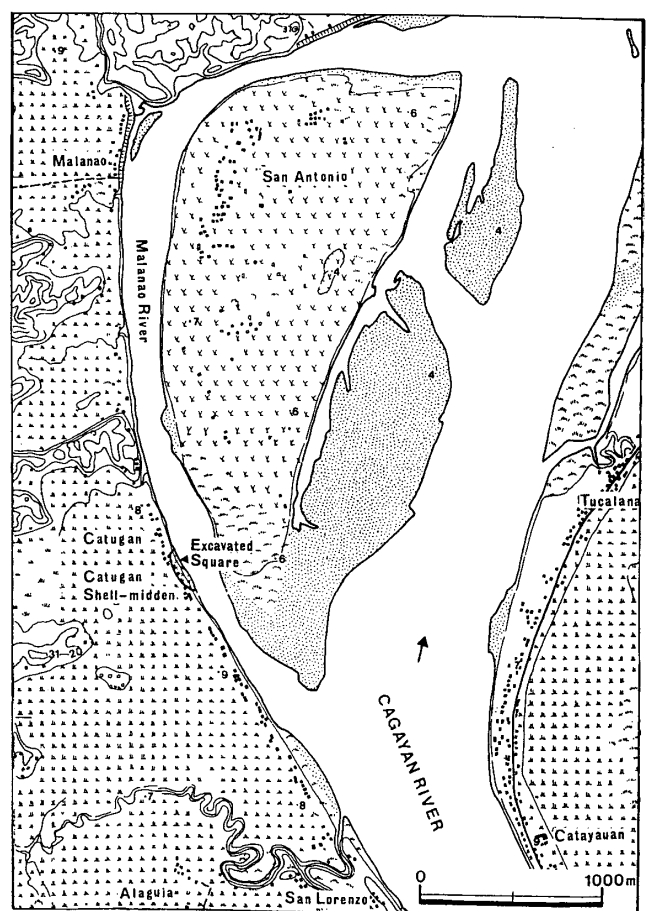


Fig.2 Location Map of the Catugan Shell-midden.

カトゥガン貝塚位置図

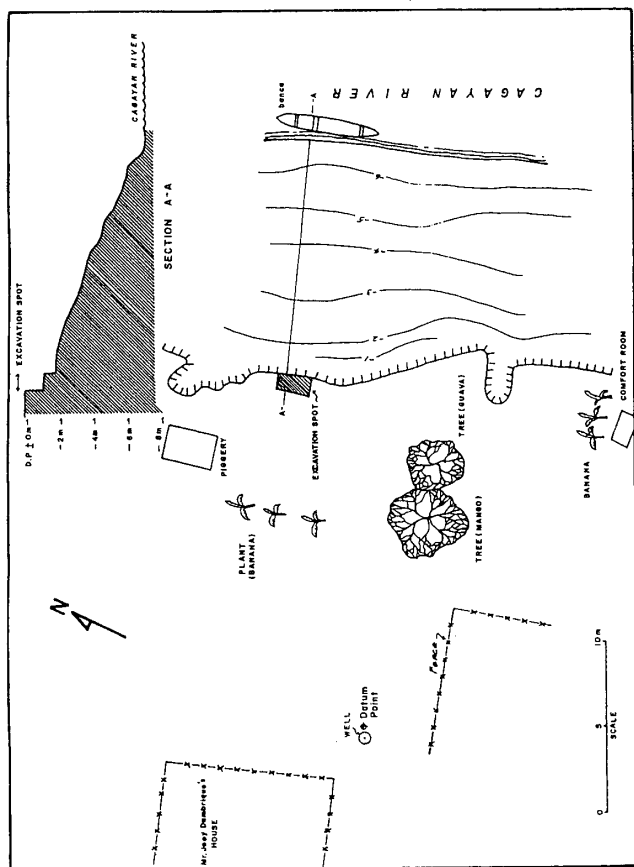


Fig.3 Location Map of the Excavated Square in the Catugan Shell-midden.

カトゥガン貝塚発掘坑位置図

者が中心となって行った発掘調査の成果について紹介を行いたい。

1996年度の発掘では、堆積層が露出していたマラナオ川に面した崖面に接して、長さ2 m、幅1 mの大きさで発掘坑が設定された(Fig.3)。発掘調査は、1996年8月13日から8月31日まで行われた。また、発掘地点の土地所有者が、ジョエイ・ドンブリケ(Joey Dumbrique)氏であったことから、この地点はドンブリケ遺跡と名づけられた。

2.4 カトゥガン貝塚の層序

堆積層は、第I層から第V層までの五つに大別された(Fig.4)。以下、各層を要約すると次のようになる。

第I層：黒褐色混貝土層(10YR3/2)

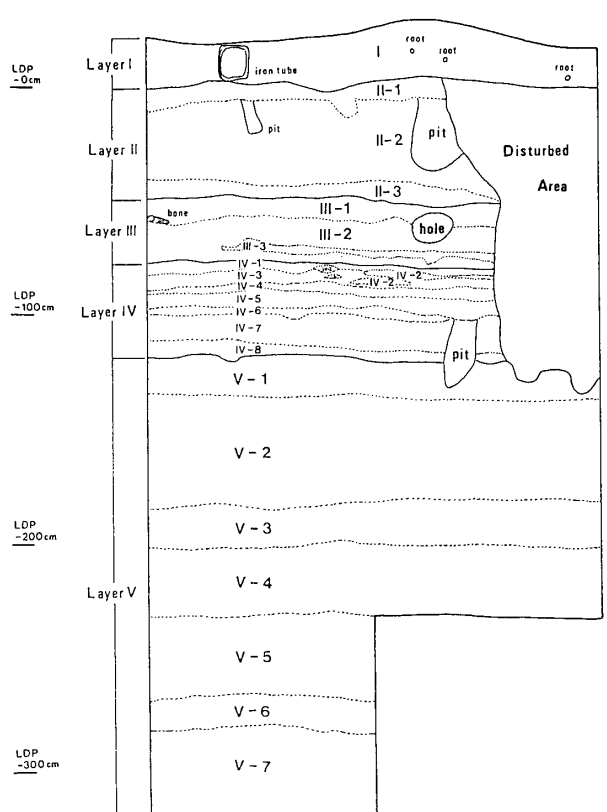


Fig.4 Soil Profile of the Catugan Shell-midden. (West Wall)

カトゥガン貝塚発掘坑西壁層序断面図

いわゆる耕作土で、貝の混入率は低く7～10%程度である。貝は、極めて小さな破片になっており、ほとんどが5mm以下の大きさである。また、多くの木根の混入がみられた。

第II層：黒褐色混土貝層(10YR4/2)

貝の混入率は50%以上と多い。含まれる貝の状態と土の色調によって3層に細分された。すなわち、II-1層は、完形貝と破碎貝の両方を含み、II-2層は、完形貝のみを含み、II-3層は、木炭が多く混入し、土の色がII-1層より暗くなった層(10YR2/2)である。

第III層：混貝褐色シルト質土層(10YR4/6)

土が主体で、貝の混入は少なく不規則である。貝の混入率によってIII-1～3層に細分された。す

なわち、Ⅲ-2層は多く貝を含み、Ⅲ-1層、Ⅲ-3層は貝の混入が少なかった。

第Ⅳ層：混土破碎貝層

第Ⅳ層は、土を含む破碎貝層であるが、貝の状態と含まれる土の色調によって、8層に細分された。まず、貝の状態については、貝が焼かれ灰化している層(Ⅳ-2層)がみられた。また、貝層中に含まれる土の色調と性質によって、褐色土のもの(Ⅳ-1層及びⅣ-8層)、黄褐色シルト質土のもの(Ⅳ-4層)、黄褐色粘土のもの(Ⅳ-7層)、黒色土のもの(Ⅳ-5層及びⅣ-6層)、黒色粘土のもの(Ⅳ-3層)に分けられた。

第Ⅴ層：粘土層

第Ⅴ層は、一様に粘性の強い粘土層である。しかし、主に色調の違いによって、第Ⅴ-1層からⅤ-7層にまでの7層に細分された。すなわち、褐色を呈する層(第Ⅴ-1層、第Ⅴ-3層、第Ⅴ-4層)、暗褐色を呈する層(第Ⅴ-2層、第Ⅴ-5層)、灰褐色を呈する層(第Ⅴ-6層)及び黄色を呈する層(第Ⅴ-7層)である。

洪水との関係でカトゥガン貝塚の層を見る時、重要な点の一つは、貝層の下面がどのようなになっているかである。カトゥガン貝塚第Ⅳ層(貝層)の下面は、その下の第Ⅴ層に潜り込んだような部分がみられず、境界面は直線的である(Fig. 4)。これは、洪水等の水流による粘土質の土の堆積後、その堆積層が完全に乾燥した後、第Ⅳ層の堆積形成が始まったことを示すと考えられる。それはすなわち、第Ⅴ層の堆積後、第Ⅳ層の堆積が始まるまで、時間的な間隔があることを示してもいと考えられる。

2.5 カトゥガン貝塚の出土土器

カトゥガン貝塚の主要な出土遺物は、土器であ

る。以下では、出土した土器を、層ごとにみることにする。

第Ⅱ層出土の土器

第Ⅱ層出土の土器は、甕形土器2点と鉢形土器3点を取り上げた。

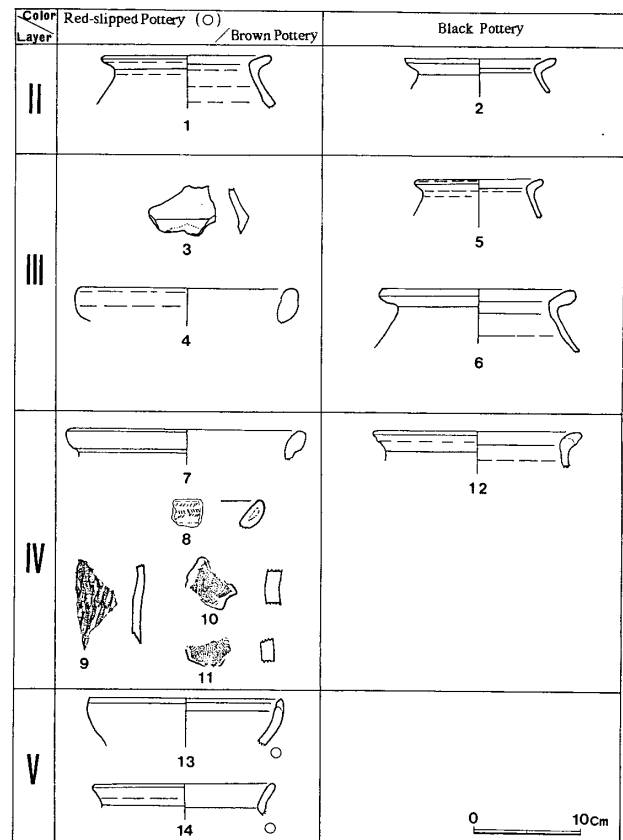


Fig. 5 Jars of the Catugan Shell-midden Site
カトゥガン貝塚出土甕形土器

甕形土器は、褐色のもの(Fig. 5-1)と黒色のもの(Fig. 5-2)がある。両者とも頸部で、“く”の字状に強く屈折するものである。また、両者とも頸部屈曲部から口唇先端部までの長さが短く、口唇先端部は厚めである(Fig. 5-1, 2)。鉢形土器にも、褐色のもの(Fig. 6-1)と黒色のもの(Fig. 6-2, 3)がある。褐色のもの(Fig. 6-1)は、口唇部から底部にかけてまっすぐにすぼまる形態で、口唇部内面がやや肉厚になっている。また、口唇先端部は、丸味を持っている。一方、黒色のもの(Fig.

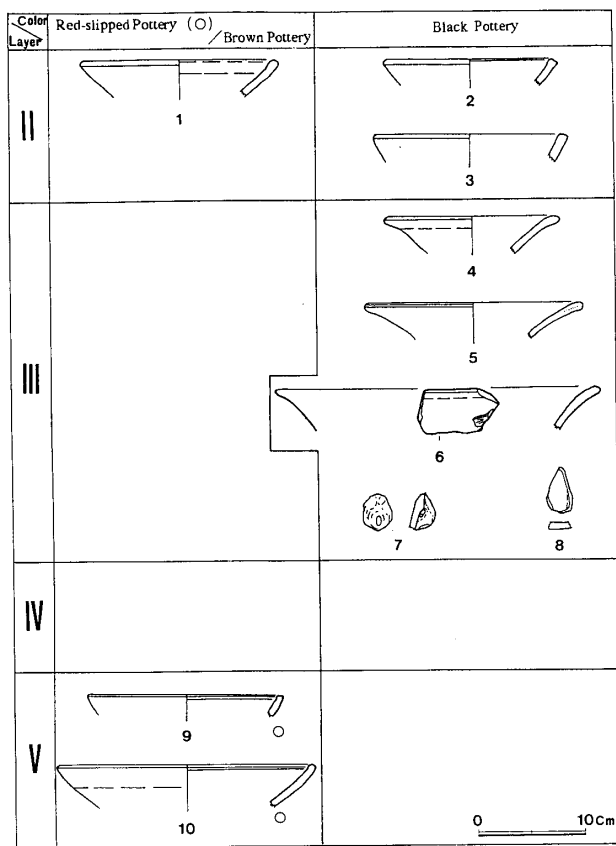


Fig. 6 Bowls of the Catugan Shell-midden Site
カトゥガン貝塚出土鉢形土器

6-2, 3)は、褐色のものと同様に、口唇先端部から底部にかけてまっすぐにすばまる形態であるが、口唇先端部は、2点とも平坦になっている。また、そのうちの一つ(Fig. 6-2)は、口唇先端部内面がやや肉厚になっている。

第III層出土の土器

第III層出土の土器は、甕形土器4点と鉢形土器4点、鉢形土器の把手1点を取りあげた。甕形土器は、褐色のもの(Fig. 5-3, 4)と黒色のもの(Fig. 5-5, 6)がある。褐色のもののうちFig. 5-3に示したものは、屈曲を持った胴部で、Fig. 5-4に示したものは、口縁部破片である。胴部片は薄手であるが、口縁部破片は厚手である。口縁部破片(Fig. 5-4)は、口縁全体が厚く肥厚するものである。黒色のものは、2点とも頸部で鋭く屈曲するも

のである(Fig. 5-5, 6)。そのうち、Fig. 5-6は、頸部屈曲後、口唇先端部までの外面がややふくらんでいる。一方、鉢形土器は、黒色のもののみが見られた(Fig. 6-4~8)。とりあげた5点のうちわけは、口縁部破片が3点(Fig. 6-4~6)、瘤状把手が1点(Fig. 6-7)、底部片が1点(Fig. 6-8)である。口縁部破片は、いずれも胴部から口唇先端部へかけて、外に反っているものである(Fig. 6-4~6)。そのうちFig. 6-4は、口縁部分のみが、強く外に反っているものである。また、Fig. 6-6は、外面右側に瘤状把手がついていた痕跡が残るものである。Fig. 6-7は、瘤状把手の部分である。長径3.4cm、短径2.8cm、高さ1.4cmの大きさで、ふくらみの中央下底部に、横方向の穿孔が施されている。Fig. 6-8は、底部片である。平坦な形態で、厚みは6mmである。胴部への立ちあがり部分が一部残存する。

第IV層出土の土器

第IV層出土の土器で器形が明らかなものは、甕形土器のみであり、鉢形土器の形態は不明である。甕形土器は、褐色のもの(Fig. 5-7~11)と黒色のもの(Fig. 5-12)に分けられる。褐色土器は、口縁部破片が2点(Fig. 5-7, 8)と有文の胴部片が3点(Fig. 5-9~11)がとりあげられた。そのうち、口縁部破片の2点(Fig. 5-7, 8)は、いずれも口縁の全体が外側に肥厚するタイプである。ただし、Fig. 5-7は、内面の輪郭が内に向けて反った形であるのに対して、Fig. 5-8は内面の輪郭が直線的である。また、Fig. 5-8は有文で、その文様は、口縁肥厚部分外面に施されている。すなわち、米粒形をした斜位の短い刻み目文が上下3段にわたって、各段が接するように横位に施されている。刻み目の傾きの方向は、相互に逆方向になっており、

第一段目と第二段目及び第二段目と第三段目というように各々接する段どうしの刻み目が、互い違いになるようになっている。すなわち、第一段目の刻み目の傾きは、右上がりであるが、第二段目の刻み目の傾きは、右下がりである。そして、第三段目の刻み目の傾きは、再び右上がりになっている。また、刻み目の一つ一つは、先端がすぼまり、中央がふくらんだ米粒のような形態を呈している。Fig. 5-9 は、薄手の胴部破片であるが、焼成は良好で、縦に並んだ幅広の棒状圧痕を持つものである。Fig. 5-10 および Fig. 5-11 は、やや厚手の胴部破片で、4本の歯を一つの単位とする櫛歯状工具によって、文様が施されたものである。Fig. 5-10 の文様は、縦位に施された流水文である。Fig. 5-11 は、中央に縦位に線が描かれ、その左右に、Fig. 5-10 に見られるような流水文が描かれている。黒色土器で形態が明らかなものは、無文の口縁部破片が1点(Fig. 5-12)である。これは、頸部から口唇先端部にかけて外反する口縁部を持っている。また、口縁部は、頸部から口唇先端部に至るまん中の部分が最も厚くなり、外面にふくらみ、そこから口唇先端部に向ってすぼまるという形態を持っている。

第V層出土の土器

第V層出土の土器は、第II層～第IV層までの出土土器と異なり、褐色土器や黒色土器はみられず、全て赤色スリップ土器である。そのうち、器形のわかるものは、甕形のもの(Fig. 5-13, 14)と鉢形のもの(Fig. 6-9, 10)である。いずれも無文である。甕形を呈するもののうち、Fig. 5-13は、頸部屈曲部から内湾して立ち上がり、口唇先端部内面に、傾斜した平坦面が作出されている。一方、Fig. 5-14は、頸部で“く”の字状に屈曲し、外反する口

縁部をもつものである。また、口唇先端部は、やや丸味を持っている。一方、鉢形土器は、口唇先端部から底部にかけて大きな変化がなく、すぼまる形態のものであり(Fig. 6-9, 10)、特徴は、口唇先端部に現われる。すなわち、両者とも口唇先端部内側がわずかに突き出るような形態である。そして、口唇先端部頂部が平坦なもの(Fig. 6-9)と丸味をもつもの(Fig. 6-10)の2種が認められる。

出土土器から見た居住の断絶

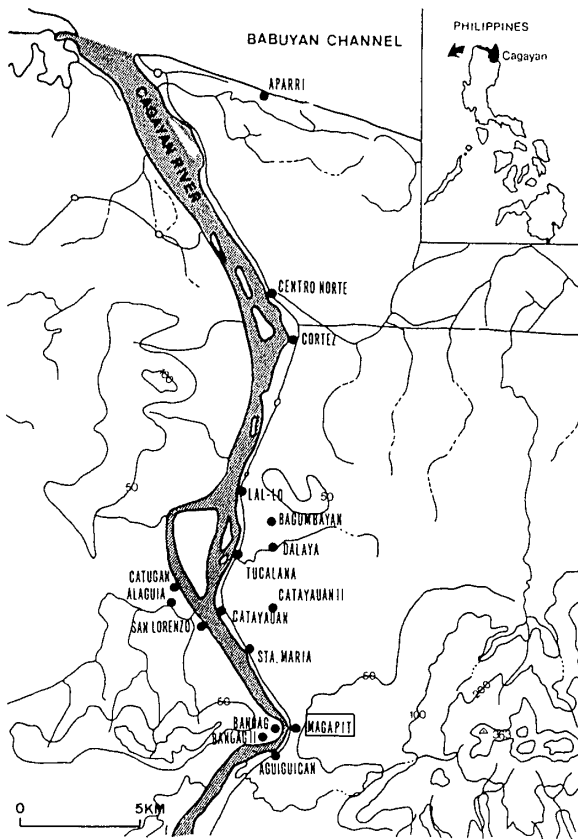
これらの土器を概観すると第II層から第IV層までの出土土器と、第V層の出土土器では大きな差異がある。すなわち、第II層から第IV層までの出土土器が黒色土器及び褐色土器であるのに対して、第V層の出土土器は赤色スリップ土器である。これは、第V層にみられた土器の製作伝統が、第IV層に至るまでの時期に断絶したことを意味すると考えられる。ではいったいこの自然堤防上にあるカトゥガン貝塚の第V層の土器を使用していた人たちは、この遺跡を放棄した後、どこに行ったのであろうか。この疑問に答えるためには、第V層と同じ型式の土器が出土し、それ以降の土器の型式学的連続性が層位で追える遺跡を捜す必要がある。筆者は、その遺跡が石灰岩丘陵上にあるマガピット貝塚であると考えている。そこで、次にマガピット貝塚とその発掘成果について紹介を行いたい。

III. 石灰岩丘陵上における居住の継続 —マガピット貝塚の調査と成果—

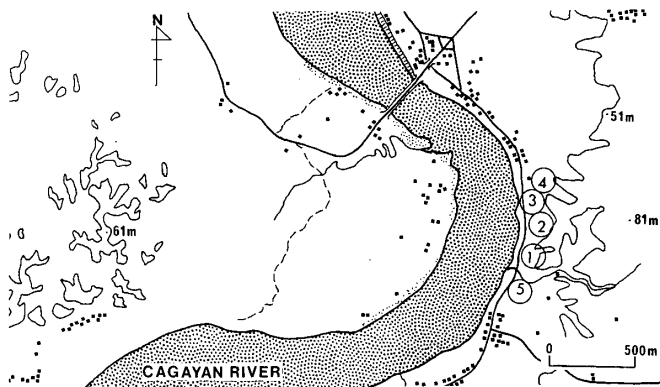
3.1 マガピット貝塚の位置と立地

ラロ貝塚群の貝塚が主に分布するカガヤン川の下流域地帯は、川の下流域地帯であるものの、川

ルソン島北部、カガヤン川下流域の貝塚遺跡に見られる居住の断絶と継続—河川の氾濫との関連で—



青柳、Aguilera、小川、田中1988：Fig.2一部改変
Fig. 7 Location Map of the Magapit Shell-midden Site
マガピット貝塚位置図



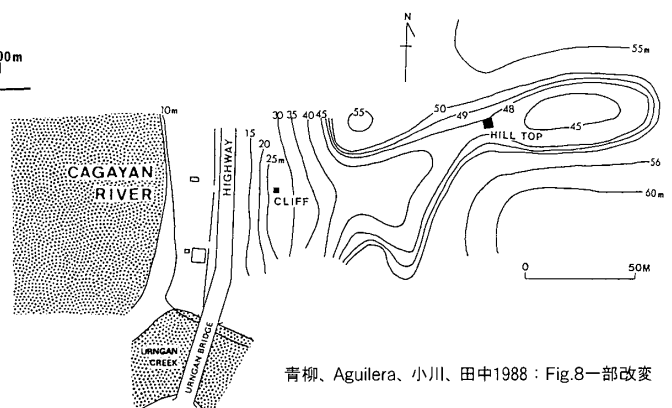
Ogawa and Aguilera 1992：Fig.6一部改変
Fig. 8 Location Map of the Loc. 1 to Loc. 5 of the Magapit Shell-midden Site
マガピット貝塚地点分布図

の近くまで丘陵が迫る地域が何箇所もある。こうした箇所のうち、ルソン島の東海岸に沿って走るシェラ・マドレ(Sierra Madre)山脈の支脈が、カガヤン川を横切って川の西岸までのびているのが、河口から川を約30km程溯ったマガピット地点であ

る(Fig. 7)。貝及び考古学的遺物は、川に面したこの丘陵の西側斜面部を中心に、断続的に南北約1km程にわたって分布し、5つの地点の遺物散布地が確認されている(Fig. 8) (Ogawa and Aguilera 1992)。このうち、第1地点と呼ばれる地点は、その南側にウルガン・クリーク(Urgan Creek)という小河川が東から西に流れ、カガヤン川に注いでいる地点で、西側斜面部その他、丘陵頂部の尾根と尾根の間の窪地および尾根の下部にも、貝及び遺物の散布がみられる地点であった(Fig. 9)。この地点における標高は、丘陵頂部の尾根と尾根の間の窪地の地表面で48mと、カガヤン川やその分流のマラナオ川の自然堤防上にある貝塚よりも、40m近く高い。

3.2 マガピット貝塚の発見と発掘調査

マガピット貝塚は、1971年、当時フィリピン国立博物館の学芸員であった現上智大学アジア文化研究所教授の青柳洋治氏と、当時フィリピン国立博物館の調査官であった I・カバニリア(Israel Cabanilla)氏の両氏によって、カリंगा・アパヤオ(Kalinga-Apayao)州の遺跡から、ルソン島北端の町アパリ(Aparri)まで行く途中で偶然に発見された⁸。その翌年、両氏によって、現在第1地点と



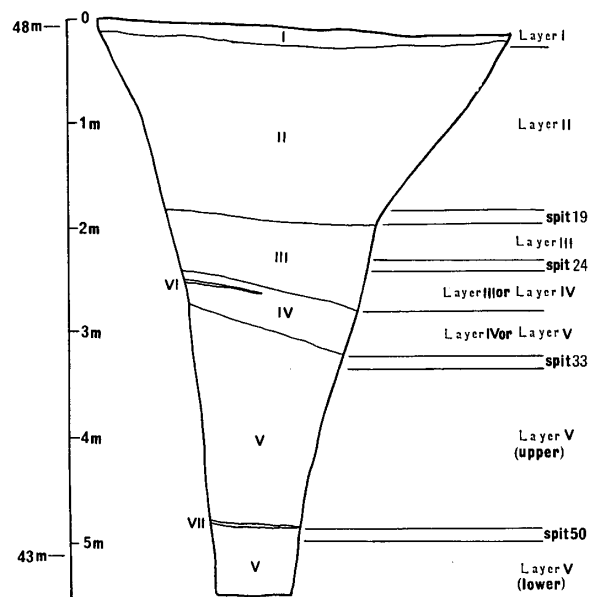
青柳、Aguilera、小川、田中1988：Fig.8一部改変
Fig. 9 Location Map of the Excavated Squares of the Magapit Shell-midden Site
マガピット貝塚発掘坑位置図

呼ばれる地点の西側斜面部及び丘陵頂部で、試掘調査が行われた。しかし、丘陵頂部の発掘は、岩盤まで至らずに止められた⁹。

その後、1977年に、アメリカのイリノイ (Illinois) 大学の大学院生、B・シエール (Barbara Thiel) が、博士論文の執筆のため、第1地点より北の丘陵の緩斜面部にあたる第2地点で、発掘調査を行った¹⁰。その後、当時、アテネオ・デ・マニラ大学に留学中で現東京外国語大学助教授の小川英文氏と、当時、国立博物館の調査官であったM・アギレラ (Aguilera) 氏が、1985～86年に行った広範囲な踏査によって、マガピット地区には五つの地点の貝及び遺物の散布地があることが明らかになった¹¹。そして、1987年9月から12月にかけて、青柳洋治氏、M・アギレラ氏、小川英文氏及び筆者が、第1地点の丘陵頂部と斜面部において、発掘区を設定し、双方の発掘区とも岩盤に達するまで発掘調査を行った。斜面部の発掘坑は、2×2mの大きさで、堆積層の厚みは、深い所でも1m程であった¹²。一方、丘陵頂部の発掘坑は、地表面で4×4mの大きさで、深さ1mで周囲に1mの“のり”を残し、3×3mの大きさに縮小した。その堆積層の厚みは5.6mに達するものであった¹³。ここで紹介するのは、丘陵頂部の地点の1987年の調査成果である。

3.3 マガピット貝塚の層序

堆積層は、表土から岩盤直上部まで貝層の堆積が続いている¹⁴。この堆積層は、貝層中に混入する土の割合と、土の色および貝の状態(完形貝か破碎貝か)を基準にして、大きく5つに分けられた (Fig 10)。すなわち、第I層：表土層、第II層：黒色混土貝層、第III層：暗褐色混土貝層、第IV層：混土破碎貝層、第V層：純貝層の5つである。また



青柳、Aguilera、小川、田中1988：Fig.9一部改変

Fig. 10 Soil Profile of the East Wall of the Excavated Square at the Hill Top of the Magapit Shell-midden Site

マガピット貝塚ヒルトップ地点発掘坑東壁層序断面図

第V層は、そのまん中にみられた薄い炭化物層を基準に、第V層上部と第V層下部に細分された。また、上に述べた五つの層のうち、第III層下面、第IV層上面および下面、第V層上面は、北から南へ10～20°の傾斜をもって堆積している。また、各層の層厚は、第I層が約10cm、第II層が約175cm、第III層が約60～85cm、第IV層が35～45cm、第V層が240～280cmである。また、第IV層中および第V層中には各々薄い炭化物層(第VI層、第VII層)が含まれている。

3.4 マガピット貝塚のC14年代測定値

出土した木炭によって、2点のC14年代測定値が得られている。すなわち、第II層(スピット9)から出土した木炭によって、2,800±140 B.P. という測定値が得られ、第III層(スピット20)から出土した木炭によって、2,760±125 B.P. という測定値がえられている。

3.5 マガピット貝塚出土の土器

ルソン島北部、カガヤン川下流域の貝塚遺跡に見られる居住の断絶と継続—河川の氾濫との関連で—

マガピット貝塚では、約20,000点の土器片が出土し、有文の土器片も特に上層部において多く認められるが、ここでは、カトゥガン貝塚第V層出土土器との比較の為、無文土器のみを取り上げた。以下、層ごとに無文土器を概観する。

第II層出土の土器

第II層出土の無文土器には、赤色スリップの甕形土器と赤色スリップの鉢形土器がある。赤色スリップの甕形土器には、頸部で“く”の字状に強く屈曲するもの(Fig.11-1, 2)と、口縁部から序々に外に向って膨らんでゆくもの(Fig.11-8, 9, 10)の2種類がある。頸部で“く”の字状に屈曲するもの(Fig.11-1, 2)は、内面の輪郭は直線的であるが、外面の輪郭は、頸部から口唇部に至る中ほどでややふくら

んでいる。また、Fig.11-1 は、胴部外面に屈曲もっている。一方、赤色スリップの鉢形土器には、浅鉢形のもの(Fig.12-2~4)と、深鉢形のもの(Fig.12-10)がある。浅鉢形のものの中には、口唇部が外に肥厚するもの(Fig.12-2, 3)と肥厚しないもの(Fig.12-4)があり、肥厚しないものは、肥厚するものより深めの鉢になる。また、後者の口唇部は、丸味を持っている。

第III層出土の土器

第III層出土の無文土器には、赤色スリップの甕形土器(Fig.11-3, 4)と赤色スリップの鉢形土器(Fig.12-5, 11, 12, 13)がみられる。赤色スリップの甕形土器(Fig.11-3, 4)は、2点とも頸部で“く”の字状に強く屈曲するものである。これらは、頸

部屈曲部から口唇先端部までが長く、内面の輪郭線が外側にやや湾曲して立ち上る。そして、口唇先端部は、外側に屈曲して蓋受け部分を作っている。一方、鉢形土器(Fig.12-5, 11, 12, 13)は、浅鉢形のもの(Fig.12-5)と、深鉢形になると思われるもの(Fig.12-11, 12, 13)に分けられる。浅鉢形のもの(Fig.12-5)は、上部外面がややくぼみ、口唇先端部がやや丸味を持っている。一方、深鉢形になると思われるもの(Fig.12-11, 12, 13)は、口縁部が逆“く”の字状に屈曲し、屈曲部から胴下部にかけて内反り気味にすぼまってゆくものである。

第III層or第IV層出土の土器

第III層or 第IV層出土の無文土器で形のわかるものは、赤色スリップの甕形土器(Fig.11-11)のみである。口唇先端部は丸味を持つ。口唇部から胴部にかけては、序々に外側にふくらんでゆくタイプである。

第IV層or第V層出土の土器

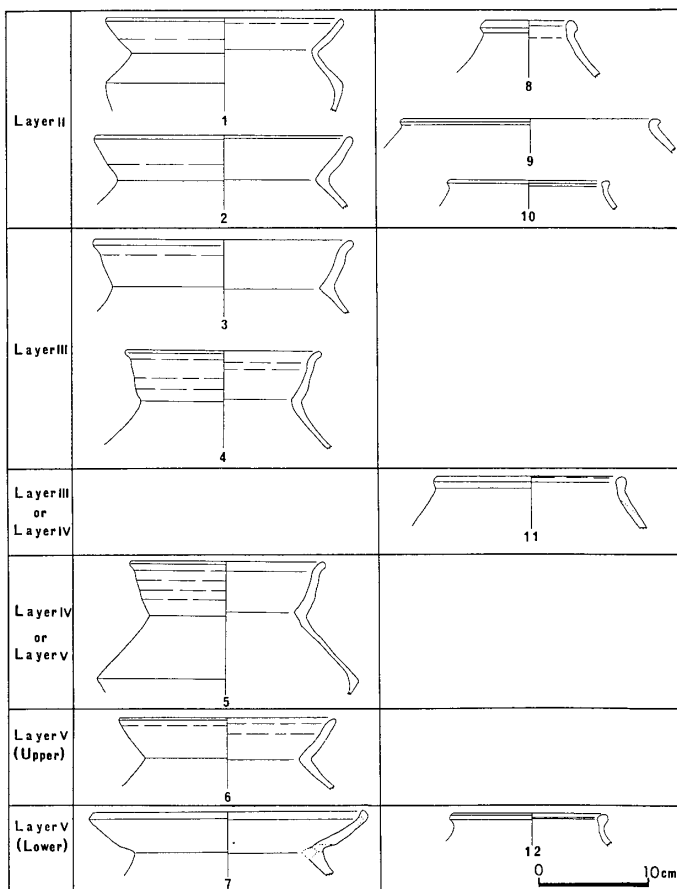


Fig. 11 Plain Jars of the Hill Top Site of the Magapit Shell-midden Site

マガピット貝塚ヒルトップ地点出土無文甕形土器

第IV層or第V層出土の無文土器で形のわかるものは、赤色スリップの甕形土器(Fig.11-5)のみである。頸部で“く”の字状に強く屈曲し、頸部屈曲部から口唇先端部にかけて長く、内面の輪郭線が外側にやや湾曲して立ち上がるものである。口唇先端部は外側に屈曲し、蓋受け部分を作っている。こうした点は、第III層出土の甕形土器に類似する。また、胴部中央部では屈曲して稜を作っている。

第V層上部出土の土器

第V層上部出土の無文土器には、赤色スリップの甕形土器(Fig.11-6)と赤色スリップの鉢形土器(Fig.12-6, 7, 8)がある。赤色スリップの甕形土器(Fig.11-6)は、頸部で“く”の字状に強く屈曲するもので、口唇部は内面が平坦になって蓋受けとなっている。しかし、第III層出土のものや、第IV層or第V層出土のもののように、口唇先端部が外側に屈曲することはない。一方、鉢形土器(Fig.12-6, 7, 8)は、全て浅鉢形のものである。口唇先端部の形態は、各々異なり、内面がやや傾いて面を作り、口縁部にいたる直前の外面がやや窪むもの(Fig.12-6)、やはり、口縁部に至る直前の外面が僅かに窪み、口唇先端部が内面にやや傾くものの平坦な面をつくるもの(Fig.12-7)、外面にくぼみなどが見られず、また、口唇先端部も平坦な面を作らず丸味を持つもの(Fig.12-8)に分けられる。

第V層下部出土の土器

第V層下部出土の無文土器には、赤色スリップの甕形土器(Fig.11-7, 12)と赤色スリップの鉢形土器(Fig.12-9)がある。甕形土器(Fig.11-7, 12)は、頸部が“く”の字状に強く屈曲するもの(Fig.11-7)と、口縁部から胴部にかけて序々に膨らんでゆくもの

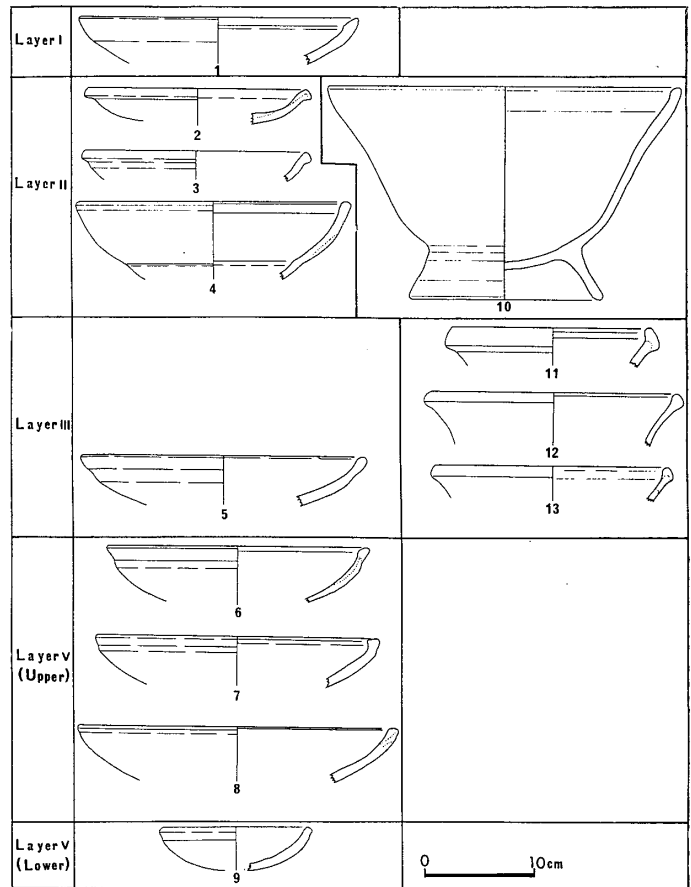


Fig. 12 Plain Bowls of the Hill Top Site of the Magapit Shell-midden Site
10は小川英文氏原図

マガピット貝塚ヒルトップ地点出土無文鉢形土器

(Fig.11-12)がある。頸部が“く”の字状に屈曲するものは、第V層上部までの類似した形態の甕形土器に比べて、屈曲の角度が鋭く、強く屈曲する。また、口唇先端部は内面が肥厚し、肥厚部の下部がやや窪むことによって蓋受けとなっている。鉢形土器(Fig.12-9)は、口唇先端部が丸味を持ち、口唇部外面がやや窪み、底部まですなりすぼまる形態のものである。口径は14cmと、第V層上部までの浅鉢形土器と比べるとより小ぶりである。

マガピット貝塚出土土器の連続性

これらの土器をみると、第V層下部から第II層まで、いずれも赤色スリップ土器であり型式学的にもつながるもので、同じ土器伝統の中で製作され

たと見なされよう。

IV. 考察

先に見たように、カトゥガン貝塚第Ⅴ層の土器は、赤色スリップ土器であり、その上の第Ⅳ層出土の土器は、黒色土器と褐色土器である。これを見るに、両者は型式学的につながらず、土器伝統は断絶していると言える。このことは、すなわち、カトゥガン貝塚第Ⅴ層の土器を使用していた人たちは、赤色スリップ土器によって特徴づけられる時代のある時期に、居住地を放棄したことを意味する。また、カトゥガン貝塚の第Ⅴ層が粘性の強い粘土質の土層で、一部シルト質の土が混入している土層であることは、この層が川の氾濫との関係で形成されたものであることを示唆する。また、カトゥガン貝塚の標高が、現在の地表面で10mをわずかに上回るにすぎないことも、氾濫の影響を受けやすいことを示唆している。

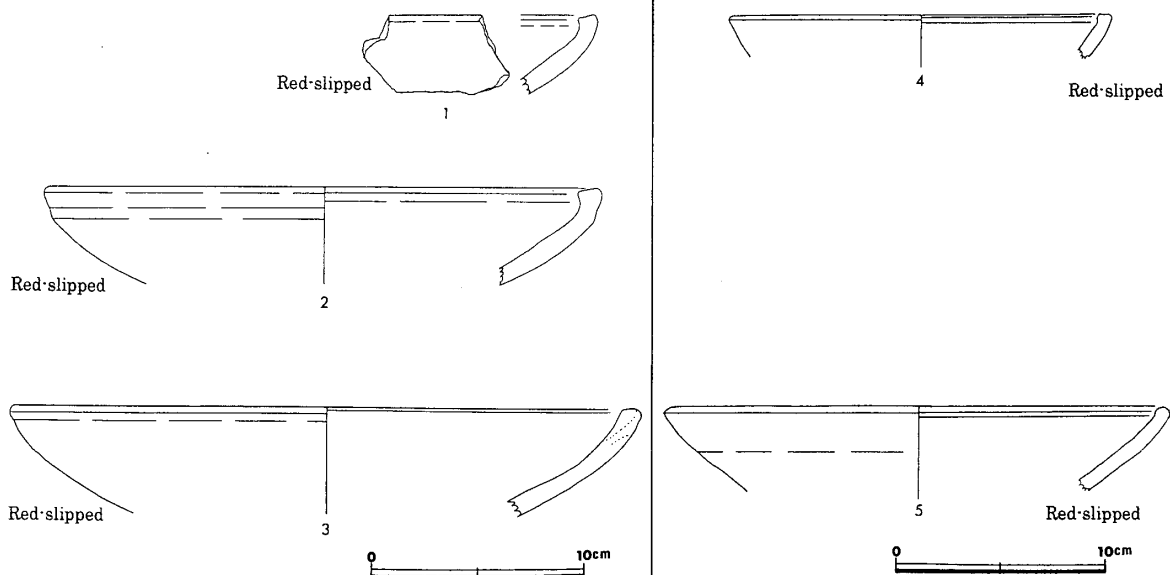
一方、マガピット貝塚は、第Ⅴ層下部から第Ⅱ

層まで、貝層がほぼ途切れることなく続いている。出土土器を見ると、第Ⅴ層から第Ⅱ層まで赤色スリップ土器を主体としており、型式学的変遷を追うことができる¹⁵。また、丘陵頂部の地表面の標高は、48mで、氾濫の影響を受けにくいことを示唆している。

また、カトゥガン貝塚第Ⅴ層の出土土器とマガピット貝塚の各層の無文土器を比較してみると、カトゥガン貝塚第Ⅴ層の出土土器は、マガピット貝塚の第Ⅴ層上部の出土土器に型式学的に類似しているといえる。特に浅鉢形土器の口縁部の形態は、両遺跡の両層出土の土器で酷似する (Fig. 13)。よって、カトゥガン貝塚第Ⅴ層の土器とマガピット貝塚第Ⅴ層上部の土器は、極めて近い時期の所産であるといえる。

V. おわりに

カガヤン川下流域のラロ、カタヤワン村で語られるカガヤン川「洪水伝説」は、貝塚が洪水の後、



マガピット貝塚第Ⅴ層上部出土鉢形土器 (1～3)
Bowls of the Upper Part of Layer V of the Magapit Shell-midden Site

カトゥガン貝塚第Ⅴ層出土鉢形土器 (4, 5)
Bowls of Layer V of the Catugan Shell-midden Site

Fig. 13 マガピット貝塚第Ⅴ層上部出土鉢形土器及びカトゥガン貝塚第Ⅴ層出土鉢形土器比較図

Comparison of the Bowls of the Upper Part of Layer V of the Magapit Shell-midden Site and the Bowls of Layer V of the Catugan Shell-midden Site

出現した事を説くものであった。一方、カガヤン川下流域のラロ貝塚群の我々の調査は、以下のようなことを明らかにした。

ラロ貝塚群における調査のうち、標高10m程の自然堤防上にあるカトゥガン貝塚の発掘調査は、第V層の赤色スリップ土器を中心とする時期に、遺跡地が居住地として放棄されたことを明らかにした。そして、その原因の一つには、氾濫が考えられた。また、同遺跡の第V層が貝を含まない層であることは、ラロ町周辺の自然堤防上の遺跡においては、氾濫の後、貝層の形成が始まったことを示している。

それに対して、標高48m程の石灰岩丘陵上にあるマガピット貝塚は、第I層から第V層下部までの堆積層の中で、第V層上部がカトゥガン貝塚の第V層と非常に時期的に近いことが、両遺跡出土の無文土器の型式学的検討から明らかになった。そして、第V層下部から第II層に至る各層出土の土器に型式学的な連続性が認められることから、カトゥガン貝塚において、赤色スリップを主とするある時期に遺跡が放棄された後も、マガピット貝塚においては、居住が続いていたことが明らかになった。また、マガピット貝塚は、第V層下部から第II層まで全て貝層であったことから、石灰岩丘陵地帯においては、氾濫前から氾濫後まで継続的に貝塚が形成され続けていたことが明らかになった。こうして考察をすすめてゆくと、マガピット貝塚のある標高の高い丘陵地が、赤色スリップ土器を主体とする時期には、氾濫の際の避難地区であった可能性が浮かび上ってくる。この点の検討については、さらに稿を改めて論じてみたい。

VI. 注

1. 小川英文 1997「貝塚洪水伝説—フィリピン、ルソン島北部カガヤン河下流域における貝採集民の民族考古学—」『東南アジア考古学』第17号：119-166.
2. 同論文 119頁
3. 田中和彦 1997a 「カトゥガン(Catugan)貝塚の発掘調査」『東南アジア考古学』第17号：210-225 及び Kazuhiko Tanaka 1998a “Preliminary report of the archaeological excavation of Catugan shell-midden (Dumbrique site), Lal-lo, Cagayan, Philippines.”『千葉敬愛短期大学初等教育科紀要』第20号:149-178. にすでに報告したものである。
4. 青柳洋治、メルチョール・アギレラ、小川英文、田中和彦 1989「ラロ貝塚群の発掘(2)」『上智アジア学』第7号：101-131.
5. 小川英文氏を研究代表者とする平成7年度～平成9年度文部省科学研究費補助金国際学術研究「ラロ貝塚群の発掘調査—東南アジア島嶼部先史時代の考古学的調査—」(課題番号：07041006)。報告書としてHidefumi Ogawa (ed.), *Excavation of the Lal-lo Shell-middens*がある。
6. 田中 1997a 及び Kazuhiko Tanaka 1998a
7. Garong, Ame 2002 “Archaeological Exploration and Test Excavation in Cagayan Valley, Northern Philippines.”小川英文編『カガヤン河下流域の考古学的調査—狩猟採集民と農耕民の相互依存関係の歴史過程の解明—』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金(基

盤A(2))研究成果報告書:33-68.

8. 青柳洋治 1977「研究史・ルソン及びその周辺諸島の考古学」『日本民族と黒潮文化—黒潮の古代史序説』黒潮文化の会編角川選書91 角川書店:187-199、及び Cabanilla, Israel 1972 “Neolithic shellmound of Cagayan: The Lal-lo excavation.” National Museum of the Philippines. Field Report #1.
9. Cabanilla 1972
10. Thiel, Barbara 1986-87 “The Excavations at the Lal-lo Shellmiddens, northeast Luzon, Philippines” *Asian Perspectives* 27(1): 71-94.
11. Ogawa Hidefumi and Melchor L. Aguilera, Jr. 1992 “Data report on the archaeological explorations in the lower Cagayan River, northern Luzon, Philippines.” 『国士舘大学宗教・文化研究所紀要』第10号:41-113.
12. 青柳洋治、メルチョール・アギレラ、小川英文 田中和彦 1988 「ラロ貝塚群の発掘」『上智アジア学』第6号:86-87.
13. 同論文:81
14. ただし、岩盤上には、薄く粘土質の土の堆積がみられた。
15. 今回ここで取り上げたマガピット貝塚の出土土器は無文土器のみであるが、同遺跡出土の有文土器に見られる文様の型式学的の変遷については、かつて別の論文(田中 1996)で論じたことがある。また、考察を含め本稿は、筆者が2002年7月にフィリピン大学人類学部に提出した博士論文(Tanaka 2002)の一部を使ったものである。

VII. 引用参考文献

Aguilera, Jr. Melchor L.

- 2000 “Preliminary Report: Results of Geomorphological Field Study Conducted in the Lower Reaches of the Cagayan River.” In Hidefumi Ogawa (ed.), *Excavation of the Lal-lo Shell Middens*, 17-26.
- 2000 “Geological and Geomorphological Study Conducted in the Lower Reaches of the Cagayan River.” In Hidefumi Ogawa (ed.), *Excavation of the Lal-lo Shell Middens*, 27-49.

Aoyagi, Yoji (青柳洋治)

- 1977 「研究史・ルソン及びその周辺諸島の考古学」『日本民族と黒潮文化—黒潮の古代史序説』黒潮文化の会編 角川選書 91 角川書店:187-199.
 - 1979 「ルソン島の古代史探訪」『新・海上の道—黒潮の古代史探訪—』角川選書 103, 角川書店:108-125.
 - 1983a “General survey in northern Luzon” In Shirakihara, K.(ed.), *Batan Island and Northern Luzon*:69-87, 116-119, 157-161. University of Kumamoto, Kumamoto.
 - 1983b 「パラワン島アビオグ洞穴出土の貿易陶磁器」『上智アジア学』創刊号: 102-115.
- Aoyagi, Yoji and Tanaka Kazuhiko. (青柳洋治・田中和彦)
- 「カガヤン川流域の貝塚土器をめぐる二、三の問題」『上智アジア学』第3号: 81-129.

Aoyagi, Yoji., Aguilera, Jr. Melchor, Ogawa,
Hidefumi and Kazuhiko Tanaka

(青柳洋治, メルチョール・アギレラ, 小川英文,
田中和彦)

1986 「カガヤン川下流域の貝塚」『上智アジア学』
第 4 号: 45-91.

1988 「ラロ貝塚群の発掘」『上智アジア学』
第 6 号: 63-104.

1989 「ラロ貝塚群の発掘(2)」『上智アジア学』
第 7 号: 101-131.

1991 「ラロ貝塚群の発掘(3)」『上智アジア学』
第 9 号: 49-137.

Bautista, Angel

1996a Animal/Human Remains from Bangag
I, Lal-lo, Cagayan. Typescript, Nation-
al Museum of the Philippines, Manila.

1996b Animal Remains from Dumbrique Site,
Catugan, Lal-lo, Cagayan.
Typescript. National Museum of the
Philippines, Manila.

Bellwood, Peter

1997 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archi-
pelago*. Revised Edition.
University of Hawai'i Press.

Beyer, Henry O.

1947 Outline Review of the Philippine Archae-
ology by Islands and Provinces, *Philip-
pine Journal of Science* 77(3-4): 250-390.

1948 Philippines and East Asian Archaeolo-
gy, and Its Relation to the Origin of the

Pacific Islands Population. *Bulletin of
the National Research Council of the
Philippines* 29: 1-130.

Cabanilla, Israel.

1972 "Neolithic shellmound of Cagayan: The
Lal-lo excavation." National Museum of
the Philippines. Field Report #1.

Chang, Kwang-Chi

1969 *Fengpitou, Tapekeng and the Prehistory
of Taiwan*. New Haven : Yale Univer-
sity Publications in Anthropology 73.

de la Torre, Amalia

2000 "Preliminary Report of the Lal-lo,
Cagayan Archaeological Project : Cle-
mente Irigayen Property Site (II-1995-O),
Sta. Maria, Lal-lo, Cagayan."『東南ア
ジア考古学』第20号 : 67-110.

Dizon, Eusebio Z.

1994 "A Decade of Archaeological Research
in the Philippines 1982-1992." *Philippine
Quarterly of Culture and Society* 22: 197-
222.

Dizon, Eusebio Z. and Rey A. Santiago

1996 *Faces from Maitum - The archaeological
excavation of Ayub Cave*. National Mu-
seum of the Philippines, Manila.

Evangelista, Alfredo E.

1967 "H. Otley Beyer's Philippine Neolithic
in the Context of Postwar Discoveries

- in Local Archaeology.” In Zamora, M. D.(ed.), *Studies in Philippine Anthropology* (In Honor of H. Otley Beyer), Phoenix Press Inc., Quezon City: 63-87.
- Fox, Robert B.
1970 *The Tabon Caves*. National Museum Monograph No.1, Manila.
- Garong, Ame M.
1996a “A Report on the Archaeological Excavation in Fausto Sison Sr. Shell Midden Site in Barangay Catayauan, Lal-lo, Cagayan.” Typescript, National Museum of the Philippines, Manila.
1996b “Progress Report on the 1996 Archaeological Excavation of the Conciso Property Shell Midden Site in Barangay Catayauan, Lal-lo, Cagayan.” Typescript, National Museum of the Philippines, Manila.
2002 “Archaeological Exploration and Test Excavation in Cagayan Valley. Northern Philippines.” 小川英文編『カガヤン河下流域の考古学的調査—狩猟採集民と農耕民の相互依存関係の歴史過程の解明—』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金(基盤A(2))研究成果報告書: 33-68.
- Garong, Ame M. and Toizumi Takeji
2000 “The Archaeological Excavation of the Shell Midden Sites in Lal-lo, Cagayan.” In Hidefumi Ogawa (ed.), *Excavation of the Lal-lo Shell Middens*, 50-78.
- Ogawa, Hidefumi(小川英文)
1997 「貝塚洪水伝説—フィリピン、ルソン島北部カガヤン河下流域における貝採集民の民族考古学—」『東南アジア考古学』第17号: 119-166.
1998 “Problems and Hypotheses on the Prehistoric Lal-lo, Northern Luzon, Philippines - Archaeological Study on the Prehistoric Interdependence between Hunter-Gatherers and Farmers in the Tropical Rain Forest -”『東南アジア考古学』第18号: 123-166.
1999 “Archaeological Research on the Prehistoric Interdependence Relationships between Hunter - Gatherers and Lowlanders - Excavation of the Mabangog Cave, San Mariano, Lal-lo, Cagayan, Philippines-.”『東南アジア考古学』第19号: 93-114.
2000a “Introduction” In Hidefumi Ogawa (ed.), *Excavation of the Lal-lo Shell Middens*, 1-13.
2000b “Discussion and Conclusion” In Hidefumi Ogawa (ed.), *Excavation of the Lal-lo Shell Middens*, 248-269.
- Ogawa, Hidefumi and Melchor L. Aguilera
1992 “Data Report on the Archaeological Explorations in the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines.”『国士舘大学宗教・文化研究所紀要』第10号: 41-113.
- Ronquillo, Wilfredo P.
1981 *The Technological and Fncional Analyses of Lithic Flake Tools from Rabel Cave, Northern Luzon, Philippines*. Anthropological Papers No.13, National Museum,

- Manila.
- 1985 “Archaeological Research in the Philippines, 1951-1983.” *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association*, No. 6, 74-88.
- 1999 State of Archaeological Research in Cagayan Valley, Northern Luzon, Philippines. Paper Presented at the 20th National Conference on Local and National History, October 21-22, 1999 at the Bulwang Juan Luna (Auditorium), University of the Philippines, College Baguio, Gov. Park Road, Baguio City.
- Tanaka, Kazuhiko (田中和彦)
- 1993 「フィリピン完新世・先鉄器文化編年研究序説」『東南アジア考古学会会報』第13号: 173-209.
- 1996 「ルソン島北部における方角石斧に伴う土器の検討—沈線による連続菱形文土器の検討—」『東南アジア考古学』第16号: 149-160.
- 1997a 「カトゥガン(Catugan)貝塚の発掘調査」『東南アジア考古学』第17号: 210-225.
- 1997b “The Kite Photography of Bangag I Shell-midden Site, Lal-lo, Cagayan, Philippines.” 『東南アジア考古学』第17号: 197-209.
- 1998a “Preliminary Report of the Archaeological Excavation of Catugan Shell-midden (Dumbrique site), LaHo, Cagayan, Philippines. 『千葉敬愛短期大学初等教育科紀要』第20号: 149-178.
- 1998b 「サン・ロレンソⅢ貝塚(シリバン遺跡)の発掘調査とその問題」『東南アジア考古学』第18号: 263-287.
- 1998c 「ルソン島北部、ラロ貝塚群、バガッグⅠ貝塚の発掘調査と若干の問題」『上智アジア学』第16号: 171-211.
- 1998d 「ルソン島北部、カガヤン川中流域、サンタ・マリア町、キナガビアン村の土器作り」『環境情報研究』第6号、敬愛大学環境情報研究所:123-152.
- 1999a 「フィリピン、ラロ貝塚-巨大貝塚の発掘と成果-」『季刊考古学』第66号: 75-78.
- 1999b “The Archeological Excavation of Bangag I Shell-Midden, Lal-lo, Cagayan, Philippines.” 『東南アジア考古学』第19号: 71-92.
- 2002 *Ceramic Chronology in Northern Luzon: Typological analysis of the pottery from the Lal-lo Shell-middens*. Ph. D. Dissertation. University of the Philippines.
- Thiel, Barbara
- 1986-87 “The Excavations at the Lal-lo Shellmiddens, Northeast Luzon, Philippines.” *Asian Perspectives* 27(1): 71-94.
- Tobias, Carol M.
- 1999 “Archaeological History of Cagayan Province.” *Hukay* Vol. 2, No.1: 9-33.
- Toizumi, Takeji (樋泉岳二)
- 1999 「*Batissa childreni*の季節的成長パターンと死亡季節査定の可能性(予察)」『東南アジア考古学』第19号: 57-69.

ABSTRACT

The Continuity and the Discontinuity of the Occupation of the Shell-midden Sites in the Lower Reaches of the Cagayan River, Northern Luzon

—with the Relation to Floods of the Cagayan River—

Kazuhiko TANAKA

There are two objectives in this article. The First is to clarify the relationship between floods and the sites in the lower reaches of the Cagayan River. The second is to clarify the correlation of two sites in this area.

For these objectives, I used the data obtained by the excavations of two shell-midden sites at the different locations: the Catugan Shell-midden Site (Tanaka 1998a) on the natural riverbank and the Magapit Shell-midden Site (Aoyagi, Aguilera, Ogawa and Tanaka 1989, 1991) on the limestone hill in the lower reaches of the Cagayan River.

The analyses of the excavated data revealed the following facts:

1. The pottery of Layer V of the Catugan Shell-midden Site and the pottery of the upper part of Layer V of the Magapit Shell-midden Site are almost contemporaneous on the basis of the typological analysis of the pottery of both sites.
2. The soil of Layer V of the Catugan Shell-midden Site is the clay partially containing the silt.
3. Layer IV of the Catugan Shell-midden Site and the pottery of Layer V of the same site are typologically totally different. Layer IV mainly contains the black pottery and the brown pottery. Meanwhile, Layer V mainly contains the red-slipped pottery.
4. The pottery from the lower part of Layer V to Layer II of the Magapit Shell-midden Site is typologically continuous.
5. The Catugan Shell-midden Site is located on the natural riverbank. The level of the site is about 10 meters above the mean sea level. On the other hand, the Magapit Shell-midden Site is located on the limestone hill. The level of the site is about 48 meters above the mean sea level.

On the basis of these facts, it is certain that the Catugan Shell-midden Site was abandoned during the period marked by the red-slipped pottery, probably because of the flood. Meanwhile, it is also certain that the Magapit Shell-midden Site was continuously occupied after abandonment of the Catugan Shell-midden Site. It is probable that the Magapit Shell-midden Site is one of the places where the people, who had abandoned the Catugan Shell-midden Site (Layer V) by the flood, transferred.